校友時報

平成3年3月7日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塙2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 ㈱大勝堂印刷

今日巣立つ43期生

328名に幸あれ！

自在の像ともお別れだ

平成二年度卒業式が今日三月七日午前十時より行われる。式には卒業生のほかに父兄、教職員、在校生、そして今年は、県教委教育長をはじめとした来賓の方々がたくさんご出席になる。

今日は三年F組の相沢恵さんが卒業生三百二十八名を代表して校長先生より卒業証書を受けとることになっている。また、生徒会長の畠山知也君が在校生を代表して前生徒会長の田村覚君が卒業生を代表して、それぞれ送辞、答辞を述べることになっている。

今日の式には受験のために出席できない卒業生も数名おり、また現在の段階では全ての大学の合格発表が終わっていないので、卒業生全員の進路が決定しているわけではない。例年のことながらいまひとつ落ちつかないところもあるが、高等学校卒業という感激は、卒業生はもちろん、出席者全員の胸にしみじみと感じられるであろう。三百二十八名の先輩が、洋々たる人生を、健康に、力強く歩いて行かれることを切望する。

佐々木満氏が大臣に

15期生 能高出身で初めて

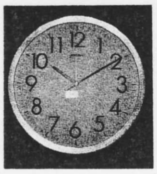
本校旧制第十五期生の、佐々木満参院議員は、昨年末の内閣改造により国務大臣、総務庁長官に就任された。本校として初めての大臣誕生である。

佐々木氏は湯沢市生まれ。能代高校在学中は野球部に属してショートやピッチャーとして活躍された。現在も野球部OBとして、帰郷のたびに母校を訪れ、後輩を励ましてくださるなど、気さくな人柄でいらっしゃる反面、大変真面目な勉強家として知られる。

東大法学部を卒業後秋田県企画調整部長を務められ、昭和五十一年に参院議員に当選されてからは、北海道沖縄開発庁政務次官、参院社会労働委員長、自民党参院政策審議会長等を歴任された。

総務庁は、行政の各方面に関わる重要な任務を負っているが、中でも行政改革の推進や、注目の北方領土問題を直接担当する部門でもある。最近は、ソ連大統領の来日を前に、みずから北海道の視察をなさるなど、精力的にまた周到に準備を進めておられるそうだ。

卒業生が時計を寄贈



教室に掛けられた時計

今日卒業式を迎えた三百二十八名から母校に残す記念品として、掛け時計（**左の写真**）が寄贈された。本校へは昨年度の卒業生から、自在の像の前庭に設置された時計が贈られており、後輩は校舎内外で便利に利用出来ることになった。

時計は全部の普通教室と、音楽室、理科の各実験室などの特別教室、それに雨天体育館等全部で三十四個、昨日までに設置が終わっている。直径三十五センチの丸型で雨天体育館のだけはやや大きめである。

在校生はコーヒーカップ

例年在校生から贈られる記念品として今年はコーヒーカップが選ばれ、昨日の贈呈式で代表に手渡された。同窓会からは、校章入りのネクタイピンが贈られた。

十一名に皆勤賞

卒業式で、今年は十一名に皆勤賞が授与される。三年間、欠席、欠課、遅刻などの全くなかった人である。受賞者は次の人々で、三年間サッカー部の選手しても活躍した三年E組の笠原宗輝君が代表となって受賞する。

（A組）唐土慎弘・藤原美亜
（B組）森川幸輝 （C組）桂田悟・佐藤容子・進藤和香
（E組）笠原宗輝・鈴木正臣・渡辺彰 （F組）近藤正憲
（G組）猪俣陽一

来年度予算案できる

生徒会 総額三百二十六万円

来年度の生徒会各部の予算案作成のため、生徒会執行部では作業を進めていたが、二月末までに予算案が出来上がった。

執行部では一月二十八日各部の代表を召集し、来年度予算編成上の方針を示し、各部の要求額の提出を求めた。

執行部では、

① 予算の総額は今年度と大きな違いはない。

② 能高祭の充実を計るため、文化部予算はなるべく削らない。

③ 来年度は全県総体が県南地区で開かれるため、交通費、宿泊費を今年より多目に組まなくてはならない。

④ 今年の実績に照らして、次年度の額を決める。今年予算を大幅に残した部は、来年は多少遠慮してもらう場合もある。

などの方針を示した。

この結果、体育局から二、二八九、五八〇円、文化局から一、三八一、二三〇円、合計三、六七〇、八一〇円の要求が出された。これは来年度の予算の三百二十万円と比べて四十七万円オーバーしているため、執行部では、一次、二次と査定を行い、すでに、体育局一九三八四六〇円、文化局一三二六四〇〇円、合計三、二六四、八六〇円で予算案を作成し終え、各部へも内示した。

正式には、新学期の生徒総会で決定される。

なお執行部では、獲得した予算を年度内に全部使い切るような、計画的で活発なクラブ活動を推進するよう、強く求めている。

女子増え続けるか

高校入試 12日に学力検査

今年の高校入試は十二日に実施されるが、今年の本校志願者は定員三二五名に対して三三八名となっており、昨年より倍率は下がっている。

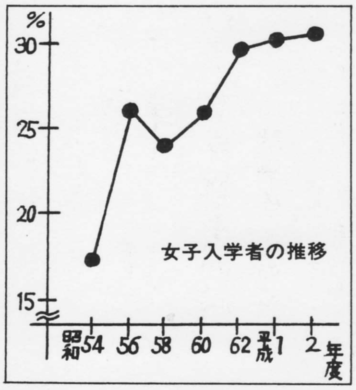
ところで、わが校生徒のうち女子生徒の占める割合が、年々増加する傾向にあることが、話題とされるようになった。

わが校の入試志願者に対する女子の割合は下のグラフでもわかるように年々増加する傾向にある。

現在在学中の女子も、三年生が九十四人（約二八・五％）、二年生が百人（約三〇・七％）、一年生が百四人（約三一・四％）のように、学年が下がるにつれて女子の割合は増加している。それとともに表立った論議にはならないものの、この傾向を喜ばない声も聞かれる。

女子が本校を志望する理由の第一は、女子の進学希望者の増加にあるようだ。ある女子生徒に聞いてみると、「他校より進学する上で有利だと思う。他校は成績の上位、下位の差が大きく、本校のように力のある人が集まっている学校の方が刺激になる。また女子校だと、いろいろな問題が起こるような気がする」と話していた。

しかし周囲の声を総括してみると、「必ずしも進学志望を堅持する女子ばかりではない」「服装や行動に規制が甘く、だらしのない女子もいる」「女子の入学により男子がはみ出してしまう」「男女の進路は違うことも多いので、指導が一本化されず、学校全体の士気が高まらない」などの声にまとまるようだ。しかし当然女子の反論もあり、議論は続きそうだ。



女子入学者の推移

進路

私立大学で健闘みせる

就職者やや増えるか

今年の卒業生の進路状況は、やはり大部分が進学志望者でしめられており、ついで公務員、民間就職となっている。

最近十年近く好景気が続いているため、公務員や民間就職の採用者数は増える傾向にあるようだ。

公務員は二月二十二日現在で、受験者数五十七名に対して、内定が二十七名となっている。

現在はまだ内定の状態なのでこの中の何名が就職するか確かではないが、昨年の公務員就職者数二十名よりは増える見込みとなっている。

民間就職は二月二十三日現在で決定しているのは男子十八名、女子二名の計二十名だが、その後の入試結果により、動きが出ると思われる。

わが校の進路希望で大部分を占めるのが進学である。

センター試験 一五五名が受験

さる一月十二、十三日の両日、秋田大学を会場として大学入試センター試験が実施された。

今年のセンター試験の受験出願者は昨年より六名少ない百五十五名で大きな違いはなかった。

今年はセンター試験が実施されて二年目になるので、昨年のような不安感はほとんど無かったと言えそうだ。

昨年の全国の受験者は四十万人を超えた。今年はそれをさらに上回り、受験生にとっては苦しい年となった。五教科六科目の全国平均点では、昨年に比べて約二十四点低い五百二十点となった。

その理由として、昨年平均点が大幅に上昇した数学Ⅰの平均点が今年は五十点と、急激に二十三点近く下がったことが第一の原因として挙げられる。

もう一つの原因としては、共通一次からの特徴で、前の年に難かしく、平均点が低かった科目は次の年には大抵簡単になったものなのだが、昨年のセンター試験に関しては数学を除いて他の科目は平均的な難易度であり今年も同程度ということから、数学の低下がそのまま全体の低下につながった。

本校の国公立大学の二次出願者数は百二十二人で昨年とほぼ同人数となっている。このうち二校併願者が九十五名で全体の約七十八パーセントを占めており、一校だけの出願は二十一名（約十七パーセント）と極めて少なくなっている。

私立大学の出願者は、国公立大との併願者を合わせて二百名に近いが、私立は一人で三、四校、多い人では十校近く出願している。

今年は三月六日現在で私立合格は延べ二百二十一名となっており、よく健闘している。

私立大学入試については、二面で詳しい資料を紹介する。

卒業生の進路

▼志望別内訳（第一志望）

国公立大	117名
私大	146名
短大・専門学校	12名
公務員	31名
就職	22名
その他	0名

●センター試験受験者数 155名
●二次出願者数 122名

出願の内容	
・3校出願者	6名
・2校出願者	95名
・1校出願者	21名
・前期日程出願者	52名
・後期日程出願者	48名
・A日程出願者	55名
・B日程出願者	62名
・C日程出願者	12名

▶学部系統別出願者

系統別	A・前	B・後	C
文系			
文・人文	8	10	3
経済	5	6	6
法	3		
その他	5	4	1
	小計		51
理系			
工	31	36	
経	5	8	
農	4	2	
医・歯	4	3	
薬	3		
その他	1	4	
	小計		101
教育系			
教育養成	36	34	2
ゼロ免	2	3	
	小計		77

▶公務員（採用内定者）

・秋田県職員	一般事務	6名
	学校事務	2名
・秋田県警	警察官	1名
・能代市役所		2名
・国家公務員	行政A	1名
	行政B	1名
	郵政A	3名
	郵政B	3名
	税務	4名
・裁判所職員		2名
・防衛庁職員		1名
・東京都庁職員		1名
・二ツ井町役場職員		1名
・自衛隊		3名

▼地域別民間就職内定者

地域	県内			県外			合計
	市内	秋田等	小計	東京	関東	小計	
男	3	9	12	4	2	6	18
女	1		1	1		1	2
合計	4	9	13	5	2	7	20

三角点

なぜ大学に行くか

▼朝日新聞の投書欄の中に「大学とは人生の上での目的を見つけ出すための場所だ」という主旨の意見が載っていた。その後すぐにこれを批判する投書も掲載されていた。このことについて読者諸君はどう考えるだろうか。▼最近の大学生には将来の自分の目標や見通しがつかないまま、四年の大学生活の終りになっても、大学に残りたいという人がけっこう多いという。これらの人々は一体何のため大学に来たのだろうか。周りが皆進学するから自分もと思ったのか。それとも大学に合格することのみが全てで自分の将来のことへの夢や意識など持つことさえ、受験勉強の中に置き忘れてしまったのか。自分の人生の目的・目標を持つことができないということは大変不幸なことではなかろうか。現在の学生の全てが真に自分の人生の目的・目標をじっくり考えているとは思えない。また現在の学校教育や社会の中にもそれを考えさせる環境や風潮があるとも思えない。その点で責任の一端は社会にあるといえる。したがって大学が自分の人生を真剣に考える場というのも理解できる。その人の責任にしてしまうのではなく受験戦争を加熱させ、大学合格のみを叫び、人をそれに追い立て真剣に人生について考えさせない社会を告発することも忘れてはならぬ。▼しかし我々は社会と環境がそうだからとか、他人がそうだからといっているわけにはいかぬ。大学に入るつもりならば自分が大学に何をしにいくのか、または大学が自分の人生にとってどんな意義をもつか考えることは進学者にとって不可欠な条件ではなかろうか。▼自分の人生である。進学にしても就職についても、じっくり自分なりに考え進むのがよいと言えよう。